

# 「大学と短大：その特性に 関する一調査研究」

富 安 玲 子

## はじめに

「もし、改めて学校へ行くとすれば、あなたはどの位の学校まで行きたいと思いますか。」という問に対して、18歳から24歳までの青年の66%が短大・大学レベルをあげている。これは「世界青年意識調査」の対象国となった11ヶ国の中でも、わが国の高等教育に対する希望がきわだって高率であることを示している。<sup>1)</sup> 実際には昭和52年度の短大・大学への進学率は38.3%<sup>2)</sup>で、30年度の10%から漸次伸長を続けたものの、50年頃から頭打ちの状態となっているところから、希望と現実とのギャップはかなり大きいといえよう。しかし、いずれにしても、高等教育への志向の強さは明らかである。

女子に限ってみると、昭和30年度は、大学へ2.4%、短大へ2.6%の進学率であったが、40年頃から短大への進学率の伸びが大きくなり、52年度の進学率は大学12.6%、短大 20.7%となっている。このように、現実には短大のシェアが多いが、女子進学希望者の希望校種の調査<sup>3)</sup>によれば、大学への希望が多くなっている。47年度調査では、進学希望者の43.9%が大学を、37.7%が短大を希望し、51年度になると大学53.6%、短大25.5%と大学進学希望の増加に対して、短大希望者は減少している。一方、高校3年女子をもつ父母を対象にした進学希望校種調査<sup>4)</sup>の結果で

---

(註) 専修学校および短大・大学の通信教育部を含めると 48.6 %

### 「大学と短大：その特性に関する一調査研究」

も、大学 43.4 %，短大 34.7 %で、生徒自身よりも、両者の差は少ないが、やはり大学希望が多くなっている。

こうした女子の大学や短大への希望あるいは現実の進学率は、男子の場合と明らかな対比を示している。すなわち、男子の場合、進学希望校種として、親も本人も90%以上が大学を希望し、現実にも進学者の5%が短大に進んでいるにすぎない。したがって、男子の場合には、高等教育への進学は取りも直さず大学への進学を意味するといっても過言ではないであろう。ところが、女子の場合には、大学か短大か、いずれを選択するかという自己決定が、進学決定の時点で、あるいはそれ以前になされなければならない。その選択に当たっては、個人の進学動機との関係、将来の生き方あるいは職業との関係、特定の短大あるいは大学の教育目標・内容などの問題、短大・大学の設置地域の問題、現実に入学を許可される学力・能力の問題などが考慮されることであろう。ある調査<sup>9)</sup>によれば、高等教育への進学を考え始めた時期は、大学希望者が中学1年で約40%、中学3年で約75%であるのに対して、短大希望者はそれより遅くなる傾向があるという。女子の場合でも、早くから進学は大学と決め、短大については全く考慮しなかったものも多いであろう。また、決定の時期が少し遅れても、大学進学は考えずに短大を選ぶものも多いであろう。このように決定について何ら迷うことのなかった人々に対して、進学を決めたもののどちらを選択すべきか迷う人もまた多い。そして、更に、選択し、入学した実際の学生生活の中でも、4年制大学への編入学や再受験をしたいとして進路変更について考え迷う短大生や、始めから短大にしておけばよかったと悩み相談室を訪れる大学生もいる。

短大と大学、その歴史的・制度的な差異はさておき、どのようなちがひがあると認知されているのであろうか。二つの調査から両者の特性について考えてみたい。

## 調 査 I

### 1. 目 的

「大学」または「短大」を選択し、それぞれ同じ専攻分野に入学したものの入学目的および専攻選択動機を知ることによって、それぞれにどのような特性があるかを明らかにすることを目的とする。

### 2. 調査時期

昭和52年4月

### 3. 調査方法

私立女子大学および私立女子短大新生を対象として行なわれた10項目からなるSCT形式のスクリーニング・テストの中から、「大学（または短大）に入学した目的は」「この専攻学科を選んだのは」の二項目について、自由記述されたものを整理の対象とした。対象者は、大学文学部国文学科および英文学科、短大国文学科および英文学科から、それぞれ無作為抽出した100名ずつ、合計400名である。

### 4. 結果と考察

#### (1) 入学目的

自由記述されたものを分類整理した結果が表1である。いくつかのカテゴリーにまたがる記述がされている場合が多いので、表の数値はそれぞれの対象者群のうちの何人がそのカテゴリーについて記述していたかの割合を表わしている。

「教養を身につけ、視野を拡げ、人格の向上のために」という教養派は大学、短大ともほぼ同率で、約3分の1の学生が目的として掲げている。種々の調査でも明らかにされている脱「専門」意識を見ることができる。

表1 入学目的

(数字は%)

		大 学		短 大		大 学 短 大		国 文 英 文	
		国 文	英 文	国 文	英 文	大 学	短 大	国 文	英 文
「教養派」	教養を身につける	18	29	31	20	23.5	25.5	24.5	24.5
	人格の向上	5 } 23 < 14 } 43	7 } 38 > 2 } 22	9.5 } 33	4.5 } 30	6 } 30.5	8 } 32.5		
「勉学派」	専門の知識習得 学問研究	27	26	19	18	26.5	18.5	23	22
「活学生派」	友との交流	5	19	10	3	12	6.5	7.5	11
	学生々活への憧れ	16 } 21 < 22 } 41	25 } 35 > 25 } 28	19 } 31	2.5 } 31.5	20.5 } 28	23.5 } 34.5		
「実利派」	資格取得・職業への準備	28	28	8	7	28	7.5	18	17.5
	就職・結婚に有利	2 } 30 < 0 } 28	49 } 57 < 74 } 81	1 } 29 < 61.5 } 69		25.5 } 43.5 < 37 } 54.5			
「リモット」	自己の発見・適性発見	15	10	2	6	12.5	4	8.5	8
	漠然とした期待感	13 } 28 > 9 } 19	9 } 11 > 6 } 12	11 } 23.5 > 7.5 } 11.5		10.5 } 19	7.5 } 15.5		
「消極的・無目的派」	すぐ社会に出たくない 高校卒で働きたい 世間の常識	21	9	11	10	15	10.5	16	9.5
	友人が進学・親のすすめ	4 } 29 > 3 } 18	2 } 21 > 6 } 24	3.5 } 23.5 > 4 } 22.5		3 } 25	4.5 } 21		
		4	6	8	8	5	8	6	7

≥ 1%水準の有意差

> 5%水準の有意差

「大学と短大：その特性に関する一調査研究」

### 〔大学と短大：その特性に関する一調査研究〕

これは一般的傾向として常識化されていることであるが、専攻学部別に見ると、文科系でその傾向がより強いという結果<sup>5)</sup>もあるので、本調査の対象者の限定からくる偏りも多少考えられるかもしれない。一方、「専門の知識を深めたい」とする勉学派が、短大より大学に多い傾向がうかがわれるが、有意差は認められない。「友との交流を深め、学生生活の中で青春を謳歌したい」とする学生生活派ともいべき目的を挙げたものも、大学、短大とも同率で、約3分の1となっている。また、「高校卒の資格では社会に出たくないし、大学（または短大）ぐらい出るとは世間の常識となっている。友人たちが進学するし、親もすすめるから」といった消極的な、特に目的のないものも大学・短大ほぼ同率であった。

大学と短大との比較を調査した篠原ら<sup>6)</sup>によれば、やはり「教養」を目的としたものが両者とも最も多い。短大生はこれに次いで「学園生活を楽しむ」「良い友人を得る」ために入学したものが多くなっているのに対して、大学生の方はそれらより、むしろ「就職準備」のために入学したものが多くなっているという。本調査では、就職と結びつけた実利派というべきものは短大生に多い。しかし、内容を見ると、短大生は「就職に有利」として、卒業後に学生生活の結果を還元することに意識が向いているものが多いのに対して、大学生は資格を取得したり、職業への準備期間としての大学生活そのものに志向している点が異なっている。先に筆者が行なった調査<sup>7)8)</sup>でも、入学目的のベスト3は、大学・短大とも、教養の涵養・学生生活の享受・職業準備であったが、「職業（あるいは就職）準備」の意味が大学と短大とでは異なっていることが示唆される。

次に、両者の差がみられるのは、自己の発見への期待や、漠然とではあるが「何かつかめる」期待感についてで、大学生が有意に多い。これはある程度具体性をもった資格取得や職業のための準備とは異なり、また、学生生活の享受とも異なっている。「何となく」という無目的派でもない。他の進路をとりたくないことから「やむなく」入学するといった否定的選

「大学と短大：その特性に関する一調査研究」

択でもなく、また、「他にすすめられて」という消極派とも異なると考えられる。浜田の類型による模索型に近く、モラトリウム派とでも名付けたいタイプと言えよう。

選択肢を用意せず、また、両者の比較の上での目的を記述するように意図したわけではないにも拘らず、短大生の約 40 %、大学生の 7 %が比較し、選択したことを記述している。短大生のあげたその理由を纏めたのが表 2 である。就職・結婚に有利、短期充実、経済負担の軽減などが理由となっている。大学生の場合は、短大の 2 年ではものたりないことを理由としてあげている。

表 2 短大選択の 4 年制大学との比較理由

(理由を記述したもの 200 名中 79 名)

比 較 理 由	人 数
大学は就職難、短大は就職有利	33
4 年間ダラダラ過すよりも短くても充実させて送ることができる	21
特別な理由ないが、とにかく 4 年間は長すぎる	15
大学を出ると婚期の遅れる	10
4 年は経済的負担大きい	7
卒業後いろいろやりたいことがあるので	5
4 年制大学希望だったが入学できなかった	3

目的意識については、社会階層によっても、また、高校生や社会人との比較によっても差異が認められるという報告もあるが、ここでは、経済社会的階層がほぼ同じと考えられる在大学生を対象にして、大学・短大の比較を行なった。彼女たちが進路決定する際に、大学生は短大との比較の上、大学を選択するというものは少なく、4 年間の学生生活そのもののプロセスを重視しているのに対して、短大生は大学との比較の上で短大を選び、その卒業後の生活への志向が見られる点が、それぞれの特性として要約されよう。

「大学と短大：その特性に関する一調査研究」

(2) 専攻学科選択動機

「この専攻学科を選んだのは」という刺激文に対して自由記述されたものを纏めたのが表3である。まず、選択の動機として多く挙げられているのが、大学・短大および両学科ともに、高校までの関連学科（国語または英語）が「好きだった」「成績がよかった」「得意だった」からで、高校までの実績を足場にしての進路決定が目立つ。

表3 専攻学科選択動機

数字は%

	大 学		短 大		大学	短大	国文	英文
	国文	英文	国文	英文				
得意だった、好きだったので	62	57	73	63	64.5	68.0	67.5	60.0
具体的に関心を寄せた分野あり	23	14	23	> 12	18.5	17.5	23.0	13.0
将来の生活・職業に役立てるため	1	≪ 43	4	≪ 33	22.0	18.0	2.5	≪ 38.0
教養として必要	17	≫ 0	19	≫ 2	8.5	10.5	18.0	≫ 1.0
人にすすめられて何となく	6	5	2	4	5.5	3.0	4.0	4.5
入試の関係で、他よりよいと思って	25	> 13	11	10	18.5	10.5	18.0	11.5

≧ 1%水準の有意差

> 5%の水準の有意差

しかし、漠然とした興味や学業成績の良し悪しによらず、具体的に強く関心を持つ分野を挙げて、それを深く学びたい為とその学科を選んだものが全体の約18%いる。有意差は認められないが、国文学科にやや多いのは学問の性質にもよるのであろうか。「平安女流文学を学びたいから」「明治初期の文学に興味がある」などの記述が見られる。こうした明確な研究意図をもったものについての大学・短大間の差は認められない。

更に、学科の特性を明らかにするのは、将来の生活や職業に役立てるためか、または教養として糧となるためか、そのいずれを選択動機とするかである。前者は英文学科に、後者は国文学科に多い。たとえば「現在の世

## 「大学と短大：その特性に関する一調査研究」

の中で英語が自由に使えなかったら困るだろうから」「国際交流の場で働きたいから」「将来必ず英語を必要とする立場になるだろうから」「外国へ行きたいから」など、直接役立つ知識・技術の習得を目指しているものが英文学科に多いのに対して、「日本人として日本の心を学ぶことが重要だから」「文学作品の中から、その底に流れる思想をもっと深く考え、人の心を理解していきたいから」「日本人としてもっと上手に日本語を使えるようになりたいから」「国際社会となったからこそ、日本人の心のふるさとを理解していきたいから」など、直ちに生活の中に生かされるというよりも内的成長を期待するものが国文学科に多い。

以上のように、専攻学科選択の動機からみては、大学・短大の相違点は認められず、専ら、学科の特性が反映される結果となった。

## 調 査 Ⅱ

### 1. 目 的

「大学」と「短大」とは、その入学目的からみて、それぞれの特性が認められたが、ここでは、両者の認知面に焦点をあてて、その発達の検討を試みた。すなわち (1) 大学と短大とはどのように認知されているか。(2) その認知にはどのような差異があるか。(3) 発達的に見てどのような変動がみられるか、について知ることを目的とする。

### 2. 調査時期

昭和53年2月

### 3. 調査方法

大学生を対象にして、「大学生生活」「短大生活」についての自由記述を求めた予備調査の結果から、「大学生生活」「短大生活」をあらわすのにふさわしい30対の形容詞項目、合計60語からなるSD形式の質問紙が構成さ

## 「大学と短大：その特性に関する一調査研究」

れた。

被験者は、以上の各項目ごとに、どちらの形容詞が「大学生活」（または「短大生活」）をあらわすのにふさわしいか。その程度は「非常に」、「かなり」、「どちらかといえば」のうち、どれに該当するか、または、その形容詞対の「どちらともいえない」と感じるのか、について評定が求められた。同一被験者が「大学生活」「短大生活」の2つの評定を行なうが、どちらを先に評定するかという順序による評定への影響を除くように無作為に二種の順序の質問紙を配布し、チェックを求めた。次いで、30対、合計60語の形容詞の中から「大学生活」「短大生活」を最もよくあらわすと思われることばをそれぞれ3語選択することが求められた。

被験者は次のとおりである。

私立女子大	2年	105名
私立女子短大	1年	70名
私立女子高	1年	88名
私立女中	2年	79名

なお、高校生88名中、大学進学希望者は27名、短大進学希望者は40名、未定21名であり、中学生79名中、大学進学希望者3名、短大進学希望者15名、未定61名であった。

### 4. 結果と考察

#### (1) 「大学生活」および「短大生活」についての認知

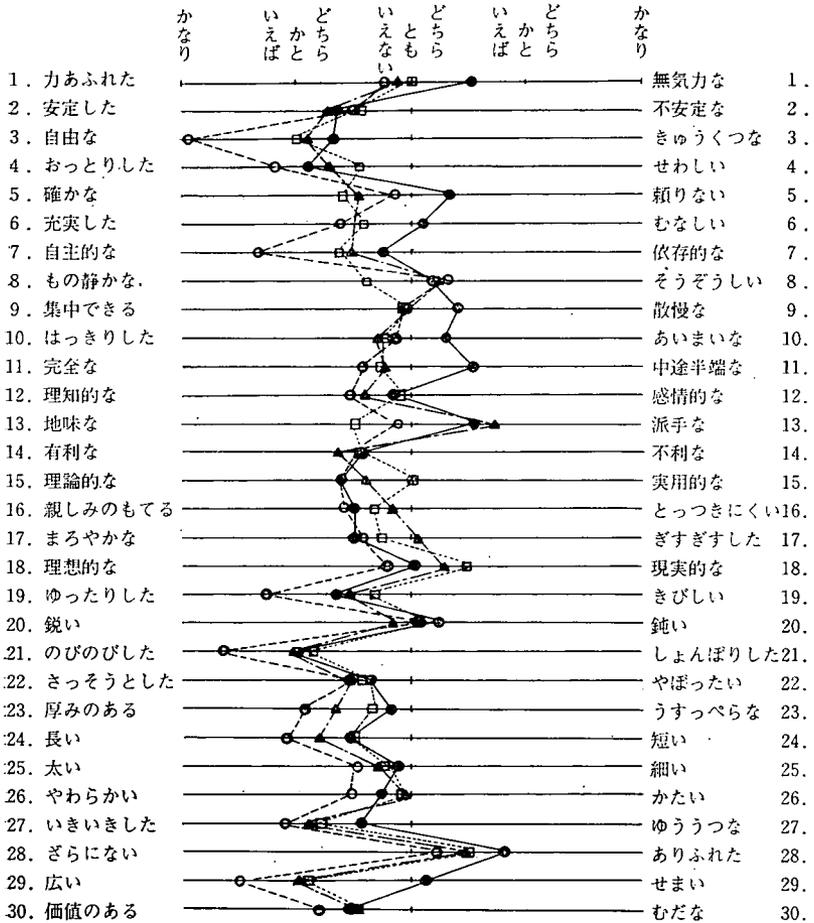
##### (i) 「大学生活」について

SD形式による評定を、どちらともいえない0、どちらかといえば1、かなり2、非常に3点を与え、一方の形容詞を+、その対を-とした結果、各群の平均のプロフィールは図1に示すとおりである。

それぞれの平均が4群とも片方の形容詞にチェックされたもの、すなわち、4群とも同じ認知傾向を示した項目は、安定した・自由な・おっとり

「大学と短大：その特性に関する一調査研究」

図1 大学生活について



●—● 大学生    ○—○ 短大生    ▲—▲ 高校生    □—□ 中学生

## 「大学と短大：その特性に関する一調査研究」

した・自主的な・理知的な・有利な・親しみのもてる・ゆったりした・のびのびした・さっそうとした・厚みのある・長い・太い・やわらかい・いきいきした・ありふれた・価値あるの17項目である。

大学生自身による認知は、他群よりも否定的な傾向がうかがわれる。他の3群よりも、その程度は小さいものの無気力で頼りなく、散漫でむなしぐ、あいまいで中途半端であると感じ、広いとは感じられず、自主的であるかどうかについても、他の3群が感じるほどには自主的であるとは思えないという結果になっている。このような認知のしかたには、入学目的に見られた、大学生生活のプロセスの中で自己を発見し、将来の生き方の方向づけを望むその期待感と現実とのギャップを示しているのであろうか。

一方、短大生による認知は、肯定的側面に位置づけられる傾向が見られる。自由で自主的、のびのび・いきいきして、おっとり・ゆったりと広い感じが他群よりも顕著である。

中学生・高校生の認知は、ちょうど大学生と短大生の間を縫っているという印象を受けるが、高校生がより派手な感じを受けているのに対し、中学生はより地味に感じ、もの静かなであると認知している点が目につく。

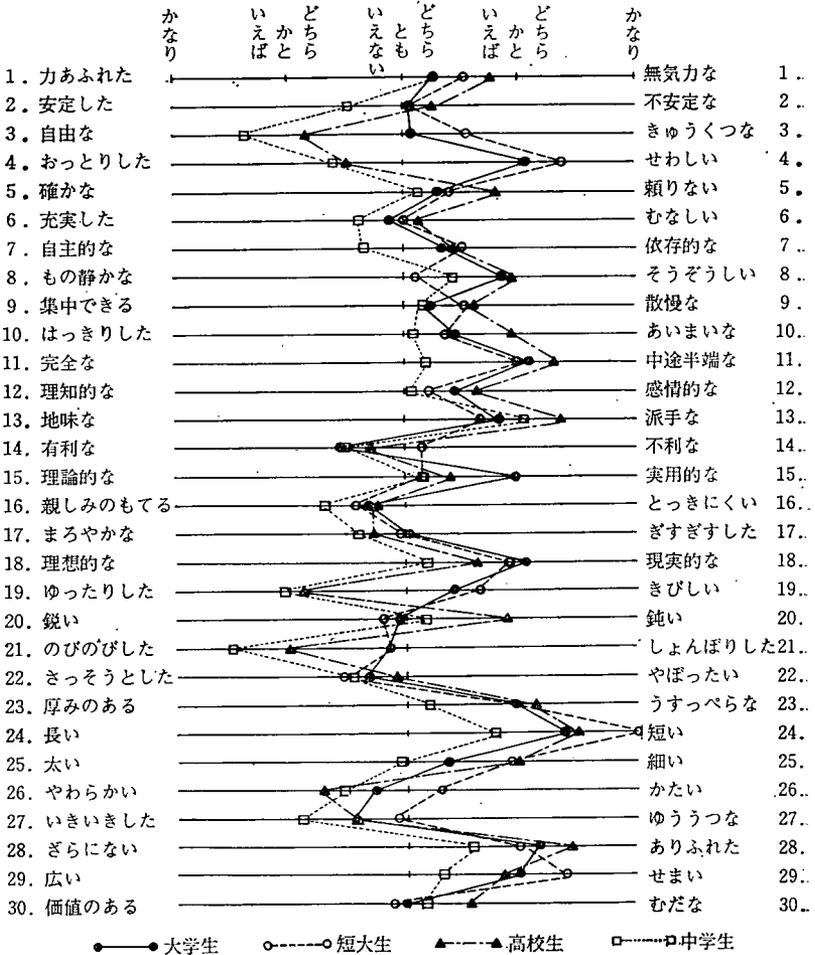
### (ii) 「短大生活」について

4群の平均のプロフィールを示した図2によると、4群とも同じ認知傾向を示した項目は、無気力な・頼りない・そうぞうしい・散漫な・あいまいな・中途半端な・感情的な・派手な・実用的な・親しみのもてる・現実的な・のびのびした・さっそうとした・うすっぺらな・短い・いきいきした・ありふれた・せまいの17項目である。

最も肯定的な認知は中学生で、他の3群よりも、安定して自由で、自主的で充実し、親しみがもてて、のびのび・いきいきして感じている。そして、中途半端・せまい・うすっぺら・ありふれた・短いという感じも他の3群より少ない。

「大学と短大：その特性に関する一調査研究」

図2 短大生活について

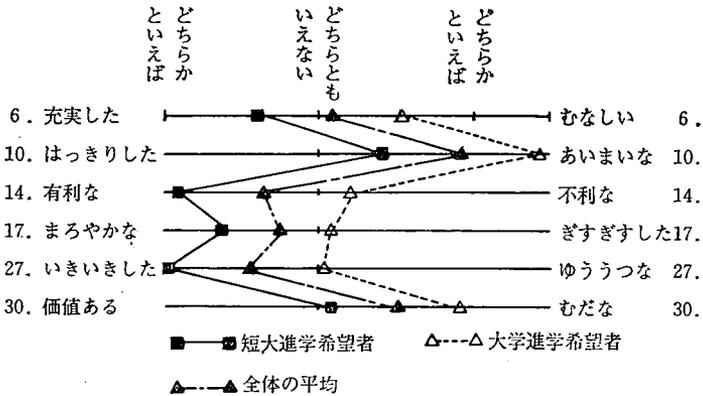


「大学と短大：その特性に関する一調査研究」

それに対して、短大生自身による認知の特徴は、より窮屈でせわしく、短く、せまくかたい感じを他群よりも持っており、そうぞうしさと派手さの関しては他群よりその程度は少ないと感じていることである。

高校生は全体としては、他の3群に比して頼りない。あいまいな、鈍いなどの否定的な感じをもっていることがうかがわれる。高校2年になると進路の決まるものもかなり出て来ており、短大か大学かによってそれぞれ

図3 高校生の進路希望別の短大生活についての認知



に対する認知も異なってくるのが考えられるので、希望別に各項目ごとの平均をとったところ、有意差のみられたのが、図3に示した6項目<sup>(注)</sup>についてであった。いずれも、短大希望者は大学希望者よりも肯定的な認知をしていることがわかる。

中・高生と大学・短大生との認知の差が顕著にあらわれているのは、中・高生が自由でおっとり・ゆったりしていると感じるのに対して大学・短大生は窮屈でせわしくきびしいと感じていることであり、のびのびしている感じも中・高生により強くもたれている。これらの側面での差は、部外者として遠くから憧れをもって眺めている認知と、当事者として、あるい、

(注) 「大学生活」については高校生の進学希望別による有意差は認められなかった。

## 「大学と短大：その特性に関する一調査研究」

はよく事情を知るものとしての現実に対する認知とのギャップであろう。

### (2) 各群別の「大学生生活」「短大生活」への認知差

4群それぞれにおいて、「大学生生活」と「短大生活」についての各項目ごとの平均の有意差が認められた項目を纏めたのが表4である。

高校生は、その進路希望別で、異なった傾向も見られるが、まず、高校生群として他の3群と共に結果を見てゆきたい。

30項目のうち、有意差の認められるものは各群によって多少異なるが、いくつかの項目においては4群共通していた。すなわち、いずれの群においても、有意差のある項目と差のない項目とがあることがわかった。共通して有意差のあるのは24、29の2項目で、これらは「大学生生活」と「短大生活」のちがいをあらわす特性として4群すべてに考えられている。これに対して、有意差のなかったのは6、9、14、16、17、22の6項目（高校の大学希望群で差が認められるものが多く、それを除くと16の1項目のみになるが）であった。

これらの共通した項目については4群とも、両者について同様な評定をしていることになるが、残る項目については各群によってそれぞれ異なった結果の見出されている。このことは、「大学生生活」「短大生活」の認知のしかたには、4群が共通性をもちながらも、反面それぞれの群でかなりの異なった特徴をもっていることを示している。

各群ごとの有意差の認められる項目数は表4のとおりであるが、中学生が3項目のみにしか差が認められないのは、大学・短大に対する認知の分化の程度が低いことを示している。被験者のうち進路を決定したものが23%であることを併せ考えると、この結果も容易に理解することができる。高等教育への進学を中学2年になると約50%が考え始めるという調査<sup>3)</sup>があるが、考え始めることと決定の間には期間があるであろうし、進路先の特性について充分認知できるようになるのは、やはり高校になって

「大学と短大：その特性に関する一調査研究」

表4 各群別の「大学生生活」「短大生活」の得点間に有意差の認められる項目

	大学生	短大生	高校生			中学生
			(大 学 希 望 者)	(短 大 希 望 者)	全 体	
1. 力あふれた — 無気力な			(▷)		▷	
2. 安定した — 不安定な			(▷)		▷	
3. 自由な — きゅうくつな	>	▷				
4. おっとりした — せわしい	▷	▷				
5. 確かな — 頼りない			(▷)	(▷)	▷	
6. 充実した — むなしい			(▷)			
7. 自主的な — 依存的な		▷	(▷)		▷	
8. もの静かな — そうぞうしい						>
9. 集中できる — 散漫な			(▷)			
10. はっきりした — あいまいな			(▷)		▷	
11. 完全な — 中途半端な		▷	(▷)	(▷)	▷	
12. 理知的な — 感情的な		▷	(▷)	(▷)	▷	
13. 地味な — 派手な		>	(▷)		>	
14. 有利な — 不利な			(▷)			
15. 理論的な — 実用的な	▷	>		(▷)	>	
16. 親しみのもてる — とっつきにくい						
17. まろやかな — ぎすぎすした				(◁)		
18. 理想的な — 現実的な	▷	▷				
19. ゆったりした — きびしい	▷	▷				
20. 鋭い — 鈍い			(▷)		>	
21. のびのびした — しょんぼりした	▷	▷				
22. さっそうとした — やぼったい			(▷)			
23. 厚みのある — うすっぺらな	▷	▷	(▷)	(▷)	▷	
24. 長い — 短い	▷	▷	(▷)	(▷)	▷	▷
25. 太い — 細い		▷	(▷)	(▷)	▷	
26. やわらかい — かたい		>	(▷)		<	
27. いきいきした — ゆううつな		>	(▷)			
28. ざらにない — ありふれた		>	(▷)		>	
29. 広い — せまい	>	▷	(▷)	(▷)	▷	▷
30. 価値ある — むだな			(▷)		▷	
有意差の認められる項目数	9	17	(2)	(9)	17	3

▷ 1%水準の有意差 > 5%水準の有意差  
 不等号は「大学生生活」>「短大生活」の関係を示すと同時に項目の傾向を示す  
 たとえば 自由な—きゅうくつな >は「大学生生活が短大生活より自由である」  
 ことを意味し。

まろやかな—ぎすぎすした <は「大学生生活は短大生活よりぎすぎ  
 すした」ことを意味する。

「大学と短大：その特性に関する一調査研究」

からなのであろう。高校になると、全体で17項目、特に大学希望者は21項目において、両者のちがいを見出している。大学希望者は大学と短大との異なった側面を意識し、大学を選択している様子がうかがわれる。短大生も17項目において差を認め、認知の分化を示しているが、大学生は9項目で、短大生に比べてかなり少ない。これは調査Iにおける入学目的についての自由記述の中で、短大生には、大学との比較の上で選択した記述が多かったことと関係があるように考えられる。すなわち、短大生は常に大学との比較によって自らの生活の位置づけを行なっているが、大学生は比較機能をもたずに位置づけることが多いことを意味しているのではなからうか。とすると、高校1年の大学希望者の短大との認知の分化をどのように解釈すべきであろうか。高校生活を送り、高等教育にはいるまでに比較意識は次第に稀薄となり、「大学」にのみ志向するようになる。すなわち、大学希望者の場合は、その決定の早い時期にその比較機能が充分働き、その後は弱まっていくとは考えられないだろうか。

(3) 「大学生生活」「短大生活」に対する各群の認知の特徴

表5. 大学生のチェック率の差の大きい項目

「大学生生活」		「短大生活」	
自由な	31.5 <sup>※</sup>	中途半端な	48.5
のびのびした	28.6	短い	38.1
自主的な	23.7	せわしい	37.1
ゆったりした	21.9	実用的な	19.0
無気力な	10.5	現実的な	19.0
理想的な	9.5	有利な	9.5
安定した	5.7	派手な	6.7

※「大学生生活」が「短大生活」よりも31.5%多くチェックされたことを示す。つまり、「大学生生活」と「短大生活」のチェック率(%)の差が31.5である。以下同じ。

以上は、形容詞対の各項目間の差を検討してきたが、ここでは60語の刺激語を比較して「大学生生活」「短大生活」をもっともよくあらわしていると思われる語を3つ選択させた結果、各項目のチェック率を比較して、差の大きいものから順に並べたのが、表5から表8までである。これらは表4の有意差の認められる

「大学と短大：その特性に関する一調査研究」

項目とはやや異なった特徴づけが見られている。

チェック率の差の大きい項目の上位は大学生、短大生とも大体同じ認知傾向を示し、両群とも「大学生生活」の「短大生活」とちがう特徴は自由で自主的でのびのびゆったりしている点であるのに対して、短大生活を短くて中途半端でせわしいと特徴づけている。

高校生と中学生は大学・短大生ほどチェック率の差が大きくない。表 7-1、7-2 に見られるように、高校生のうち、大学希望者が「大学生生活」に対して、より肯定的側面をチェックしているが、短大希望者が「短大生活」に対して必ずしも肯定的とは言えない側面をチェックしているのが気になる。短いことからくる中途半端なせわしい感じは避けられないのであろうか。中学生の認知は、大学・短大生が「大学生生活」を特徴づけた側面を「短大生活」の

表 6 短大生のチェック率の差の大きい項目

「大学生生活」		「短大生活」	
自由な	50.0	短い	50.0
自主的な	27.1	中途半端な	38.6
ゆったりした	25.7	せわしい	30.0
のびのびした	24.3	きゅうくつな	21.4
厚みのある	17.1	うすっぺらな	18.6
広い	14.3	派手な	12.9
おっとりした	11.4	依存的な	8.5

表 7 高校生のチェック率の差の大きい項目

「大学生生活」		「短大生活」	
価値ある	14.8	派手な	26.1
のびのびした	14.7	中途半端な	19.4
自主的な	13.6	むだな	11.5
地味な	12.5	あいまいな	11.4
理論的な	12.5	無気力な	9.1
理知的な	9.1	短い	9.1
広い	9.1	ありふれた	6.8

表7-1 高校生のうちの大学希望者のチェック率の大きい項目

「大学生生活」		「短大生活」	
価値のある	25.9	派手な	37.0
充実した	22.2	中途半端な	29.6
のびのびした	18.5	うすっぺらな	22.2
自主的な	14.8	無気力な	18.5
完全な	14.8	むだな	18.5
理知的な	14.8		

「大学と短大：その特性に関する一調査研究」

表7-2 高校生のうちの短大希望者の  
チェック率の大きい項目

「大学生生活」		「短大生活」	
理論的な	17.0	派手な	22.5
長い	12.5	あいまいな	15.0
ゆったりした	12.5	短い	10.0
のびのびした	12.5	せわしい	10.0
広い	10.0	中途半端な	10.0

表8 中学生のチェック率の差の  
大きい項目

「大学生生活」		「短大生活」	
長い	10.1	派手な	12.7
とっつきにくい	7.6	短い	11.9
きゅうくつな	7.6	親しみもてる	8.9
きびしい	6.4	自由な	8.9
厚みのある	6.3	せわしい	7.6
完全な	6.3	中途半端な	6.3
充実した	5.1	のびのびした	5.0

特徴として掲げている。自由でのびのびしていると認知する点である。また、長い—短い、とっつきにくい—親しみもてるという外部から関わる評定項目が、差の値は小さいながら、上位に位置するのは中学生としては当然といえるであろう。

以上から調査Ⅱの結果は次のように要約される。

(1) 「大学生生活」に対して、4被験者群とも同じ認知傾向を示すのは30項目中17項目で、大学生自身が他群よりも否定的な認知を、短大生が

他群よりも肯定的な認知をしている。

(2) 「短大生活」に対しても、30項目中17項目について4群とも同じ認知傾向を示し、中学生がもっとも肯定的な認知をしている。高校生では、その進路希望別によって差がみられた。

(3) 「大学生生活」と「短大生活」の認知差については、30項目中8項目で4群とも同様な結果が得られ、認知についての共通性が示されたが、また、各群の特徴も認められた。

- (i) 中学生ではまだ認知の分化の程度が低い。
- (ii) 高校生になると認知の分化は高まり、進路希望別で異なる結果が得られた。
- (iii) 短大生も分化した認知をしているが、大学生は短大生よりも分

## 〔大学と短大：その特性に関する一調査研究〕

化していない。これは未分化のためというよりも、比較機能を常に働かせることの少なさの反映ではないかと考察された。

- (4) 30 項目の各形容詞対ごとの評定に対して、60 語の形容詞をすべて比較して両者の特徴をとらえると、そのチェック率の大きいものがそれぞれの特徴として認知されていることになる。

その結果、項目ごとの評定とはやや異なった特徴づけが見られたが、中学生を除く他の 3 群では全般的に「大学生活」を肯定的に、「短大生活」を否定的にとらえている傾向が認められた。

(付記) 快く調査にご協力くださいました愛知淑徳中・高校の富永校長先生，東浦副校長先生はじめ諸先生に厚くお礼申しあげます。

## 文 献

- 1) 総理府青少年対策本部編 世界の青年との比較からみた日本の青年——世界青年意識調査(第 2 回)結果報告書——1978.
- 2) 文部省 文部統計要覧(昭和53年版) 1978.
- 3) 総理府青少年対策本部編 青少年白書(昭和52年版) 1977.
- 4) 日本リクルートセンター 父母の進学への期待度調査 1978.
- 5) 日本リクルートセンター 進学動機調査 1973.
- 6) 篠原しのぶ・梁井迪子 女子学生の生活意識と社会的態度に関する研究 厚生補導20号54—64 1968.
- 7) 富安玲子 学生相談室より 「淑徳大学」3号5—9 1976.
- 8) 富安玲子・熊沢寿子 本学入学生の意識調査について 「淑徳短大」6号6—8 1977.
- 9) 浜田哲郎 志望動機の因子構造と因子類型に関する研究 九大教養部テオリァ第18輯1—18 1975.